

くすりの  
散歩道

# インド大麻

「東洋」を象徴した幻惑と陶酔

た  
い  
ま

世界的文豪アレクサンドル・デュマの名作『モンテクリスト伯』に、船乗りシンドバッドに扮した主人公エドモン・ダンテスが、知り合った青年フランツに杯いっぱいハシシュのジャムをすすめる場面がある。デュマはその場面を次のように描写している。

ジャムを食べた青年の精神は今までに経験のないほどに明晰となり感覚は倍も鋭くなって、やがて紺碧の海と輝く太陽の光とかぐわしいそよ風の芳香に包まれ、三人の美女による抱擁に身を任せ、息も絶

千葉大学 名誉教授  
**山崎 幹夫**  
Mikio Yamazaki

え絶えの快樂に打ちのめされた。しかし三人の美女は、実はそこに立つ大理石の女性像であり、夢のような青年の経験は幻覚の世界での出来事であった。

ハシシュは、花が咲き始めたインド大麻の穂先から採取された樹脂である。穂先そのものを切り刻んだマリファナはタバコに混ぜて使われる。マリファナはポルトガル語で中毒を意味する *mariguango* に由来する。

アサ *Cannabis sativa* は中央アジアを原産地とするアサ科の一年生草本である。場所や気候の違いによって変種が生まれ、わが国を含む東アジアなどに生育するアサは草丈が高く、繊維植物あるいは種子から採取する油の原料植物として栽培された。一方、中央アジア、インドなどのアサは繊維の原料にならないほどに草丈が低い。この変種はインド大麻 *Cannabis*



*sativa var. indica*と呼ばれた。「大麻(たいま)」は薬として使われたアサの呼び名である。

大麻としてのアサの利用は、イタリアの探検家マルコ・ポーロの残した記録『東方見聞録』の「山の老人」についての記述によってヨーロッパ諸国に広まったと思われる。

昔、イランの奥地に、ぶどう酒やミルクの小川が流れる庭に囲まれた黄金に輝く宮殿があり、そこは「山の老人」が住んでいた。老人は武芸にすぐれた12歳から20歳までの若者を集めて「薬」を与えて眠らせ、目覚めた青年たちにはぶどう酒やご馳走が与えられ、目の覚めるような美女たちにかしずかれて彼らは夢のような快樂の日々を送った。

やがて、老人の前に引き出された若者たちは「もう一度あの夢の世界に戻りたいのであればどこに住む誰それを刺殺せよ」と命じられた。また「たとえ暗殺が失敗に終わってもお前たちがふたたび天国に戻れることは間違いがない」とも言われた。正気を失った青年たちは勇躍して死地に赴いた。

こうして「山の老人」は青年たちを駆使し、近隣の王や貴族らを脅して権力と巨万の富を得たとされるが、やがてフビライ・ハーンの弟フラグ・ハーンの来襲を受けて滅ぼされたと伝えられる。「山の老人」が使った魔法のような薬の正体こそはインド大麻の樹脂ハシシュであったと考えられ、英語のassassin(暗殺者)の語源になったという説がある。

マリファナやハシシュの示す向精神作用についてはすでに数多くの研究が行われ、論文の数も多い。その結果、もっとも顕著な作用は精神的緊張の解除と陶酔感の誘起であるとされている。この作用の特徴として興味深いのは、個人の性格、教養、あるいは環境等の違いによって効果に著しい

差が認められることで、ある人には幸福感をもたらしながら、人によっては不安を感じさせ、恐怖にさいなまれることもある。一般には暗示にかかりやすくなる。感覚は鋭敏になり、色彩は鮮明に、形は歪んで見える。また音を視覚的に感じ取ることがあり、音楽を絵画的に捉える、考えていることが形になるなどの現象も認められる。大量の摂取は幻覚をもたらす。

マリファナを使用する場合、煙草として喫煙すると内服より3倍も強い効果を発揮する。実はインド大麻には主作用成分としてカンナビノールが含有されるが、植物体内にはテトラヒドロカンナビノール酸(THCA)の形で存在し、熱や光によりCO<sub>2</sub>を失って生じるテトラヒドロカンナビノール(THC)が大麻の真の作用成分になる。

中近東から東地中海地域、インドのあたりではアサが麻薬的な役割を果たしてきたのに対して、日本や中国、東アジアの地域では栽培の目的は繊維を集め、布、衣服、縄、紐などに利用することに限られていた。元九州大学薬学部の故西岡五夫教授は、わが国に自生してきたアサにはTHCA含有種はほとんどなかったという興味深い研究結果を発表されている。西岡氏は、THCをほぼ含有しないCBDA(カンナビジオール酸)種が、最近の交配によってTHCA種に変化してきていると推定された。

ところで、マリファナの喫煙については、常用者が喫煙や摂取を中止したときの「禁断症状」は発現せず、成分の毒性(致死毒性)も強くない。そのことを理由に、マリファナはいわば酒や煙草と同じ程度の嗜好品であるのに、これを取り締まるのはおかしいのではないかという意見はずっとあった。しかし中毒は無いわけではない。元九州大学の故植木昭和教授はTHCを注射したラットは群飼育では異常をみせないが1匹だけを隔離すると凶暴性を発揮し、差し出した棒を噛み砕いたりマウスを襲ったりしたという研究結果を発表された。この行動は群飼育に戻すと消失し、また1匹にすると再発現した(攻撃性が残っていた)という。アメリカで報道された孤独なマリファナ常用者における犯罪反応の増加という報道との相関が危惧される。